平成 27（2015）年 5 月 25 日発刊

# 南極ＯＢ会　会報

Ｎｏ．２５

発行　南極 OB 会
会長 国分 征
編集　広報委員会

今号の主な内容

○第 55 次越冬活動を終えて　○第 56 次南極地域観測夏隊報告
○第 18 回「南極の歴史」講話会を秋田支部と共同開催
○話題：「南極賛歌」の合唱曲（池辺晋一郎作曲）が誕生した！　○追悼　小野延雄先生
○南極関連情報　　○支部便り（東海）
○隊次報告（29、43 次）
○会員の広場　○広報委員会からのお知らせ

## ＜総選挙に不在者投票、昭和基地からの情報発信活発に＞

## 第 55 次越冬活動を終えて

越冬隊長　　牛尾 収輝（国立極地研究所）

南極で二度目の夏を迎えた 12 月、昭和基地にヘリコプターが飛来した。待ちに待った第一便が届けられ、懐かしい日本の香りに歓ぶと共に、見慣れぬ顔ぶれに少し戸惑

っていることも自覚した。いよいよ越冬終盤に向けて大きな節目に差し掛かり、これから一層慌ただしくなる日々を控えて身の引き締まる思いを新たにした。難航を極めた末の昨シーズンの基地接岸によって、燃料他の全物資が運び込まれたことが、その後の私達の越冬活動を力強く支えてくれた。無いものは作るか代用するのが南極、とは言っても、大規模な基地、ハイテクで稼働する機器や設備の多さと複雑さ、それらを駆使した数々の観測・設営作業計画を持ち込んでいる現状から見ると、夏の輸送が安定した越冬の要となることは論をまたない。輸送の重要性は近年益々高まり、その重責の中で、迎えの 56 次隊が日高艦長はじめ乗組員の皆様と共に一致団結して昭和基地へ到着されたことは何よりも嬉しかった。接岸、輸送、観測・設営作業を成し遂げられたことに改めて敬意を表する。

55 次隊では基地燃料の備蓄回復に向けた一策として、越冬隊員数を 24 とした。基地設備のトラブルや事故が無ければ、少数態勢をそれほど強く意識しない。ところが、野外行動に数名が出かけたり、除雪など多くの労力を要したりすると、基地維持にかかる負担は大きくなる。特に越冬後半に続発した負傷事故に際しては、業務と生活の両面で支援・対応策を組み立て、一層の協力態勢で乗り切った。これも越冬で培われたチーム力のお蔭で、23 名の隊員に感謝している。しかし、このことは越冬隊の規模の大小に依らず、観測隊員の代わりは何処にも居らず、一人一人に重い責務がかかっていることに変わりない。越冬中は節電に日々努め、上向きの燃料備蓄を維持できたことも、前シーズンの 100%輸送があったからこそ実現したものと言える。

今次隊でも基地においては除雪を通年にわたって続けなければならない、多雪の年であった。多雪傾向は 50 次隊以降続いている。日々の作業は重機による広範囲の除雪から人海戦術による手掘りまで、昼なのに薄暗い厳冬期でさえ汗だくとなった。12 月初旬に襲来したブリザードは除雪作業を一時停滞させた上、基地全停電も重なった。荒天下で復電作業に当たり、1 週間で 3 日にわたって発生した停電の原因が、老朽化した送電ケーブルの絶縁不良にあることを突き止めた。以降、夏オペ準備で残っていた作業を挽回し、第一便前に 56 次隊受入れ体制を完了させた。

越冬中、野外行動に出かけたメンバーは、基地に居ては感じられない“生”の南極を存分に体験できただろう。海氷や氷床上でルートを徐々に伸ばし、55 次隊として初めての地に辿りついた時には、未知に挑んだ昔の探検隊が味わったであろう感動を私達も共有できたにちがいない。今次の野外行動の最遠・最南の到達地は大陸氷床上の S122 地点。この内陸旅行の成功も過酷な環境に耐えたメンバー6 名のみならず、11 日間にわたって昭和基地を守った 18 名、全員の協力の賜物と言える。

**昭和基地に設置された投票所**
**（極地研ホームページより）**

夏隊と越冬隊とで時間の長短に違いはあっても、南極で活動する私達全てに通ずることは、その時、その場で各人に与えられた役割を如何に果たすかを意識することの肝要さであろう。南極における仕事や生活のあらゆる場面では、工夫の余地が無限にある。復路の多年氷帯をゆっくりではあるが着実に前進している時、南極では多くが「忍」の字で言い尽くされることを改めて実感した。厳しい越冬を遂げた各人の思いは様々で、帰国後の暮らしの中で振り返ることで、思い出はさらに鮮明に刻まれると思う。時には、南極で感じ、考えたこととは違った視点で自身を見つめられるかもしれず、それが南極越冬の素晴らしさを再発見する機会になると信じたい。

今や情報に飢えることは少なくなった越冬隊であるが、帰国後は否応なしに大衆の中に放り込まれ、貨幣経済をはじめ大量生産・大量消費社会など、慌ただしい世の中の流れに馴染むべく、リハビリに努めてきた。一昨年の出発以来、長きにわたっていただいた暖かいご支援、ご指導に厚く感謝申し上げる。

## ＜ラミング 5,406 回で接岸、チャーターヘリも活躍＞

# 第 56 次南極地域観測夏隊報告

観測隊長　　野木義史（国立極地研究所）

第 56 次観測隊および同行者 71 名は、昨年 2014 年 11 月 25 日に成田空港を出発した。翌 26 日に西オーストラリア・パース空港に到着し、同日フリマントル港に入港している、「しらせ」に合流し、港で観測隊がチャーターしたヘリコプターや、生鮮食料品等を搭載後、11 月 30 日快晴の西オーストラリア・フリマントル港を出港した。

**昭和基地沖に接岸した「しらせ」**

「しらせ」は、東経 110 度線に沿って、海洋観測を行いながら南下し、暴風圏に入り、12 月 5 日に南緯 55 度を通過した。「しらせ」は、12 月 15 日に「流氷域」に到着し、今年は水開きの部分があり、比較的順調に船は進んだ。12 月 17 日に「定着氷」に到着し、砕氷航行を開始した。この定着氷の入り口に、「乱氷帯」がかなり広がり、積雪も多く、苦戦を強いられた。21 日頃から「乱氷帯」の地域をほぼ抜け、徐々に前進する距離が長くなり、23 日には、昭和基地北西約 60km に到達し、ここから観測隊がチャーターしたヘリコプター2 機を昭和基地に移送、翌 24 日には、昭和基地北西約 40km から、「しらせ」の大型ヘリコプターによる「第一便」が、第 55 次越冬隊の待つ昭和基地に、生鮮食料品や家族への託送品などを送り届けた。その後も「しらせ」は前進を進めながら、当面の観測・作業を実施するために必要な物資などの輸送を実施し、同日昭和基地北北西約 24km に達し、この地点から 27 日まで、「しらせ」の大型ヘリコプターによる昭和基地への輸送が、引き続き行われた。この間に、56 次隊員および同行者の大半が順次昭和基地に入り、昭和基地を拠点とした、約 2 ヶ月弱の夏期の観測や作業などが始まった。

12 月 28 日、「しらせ」は、「多年氷帯」への砕氷航行を開始し、ほぼ昨シーズンと同様に進む事ができ、約 15 日間の奮闘の結果、1 月 12 日に見事に昭和基地接岸を果たす事ができた。定着氷入り口の乱氷帯から、多年氷帯を突破し、昭和基地接岸まで、往路のラミング回数は、3,187 回という記録的な数字となった。55 次隊に続き昭和基地沖接岸を果たし、昭和基地接岸から休む間もなく、本格的な輸送が開始され、昭和基地へ燃料を含む全物資を輸送することができた。これにより、昭和基地の燃料備蓄はほぼ回復した。昭和基地では、多くの夏期基地整備作業が実施され、風力発電装置や車庫の建設をはじめ、汚水処理施設の工事、発電機のオーバーホールや建物の補修作業などが行われた。南極最大の大型大気レーダー(PANSY)の整備も進み、今次隊で 100％ 整備が完了し、フルシステムで観測を開始する準備が整った。越冬中の観測成果が期待される。

**野外観測で活躍する観測隊ヘリコプター**

昭和基地周辺の野外観測も、観測隊がチャーターしたヘリコプターを中心に、活発に実施された。今次隊は、ニュージーランドを拠点とする HNZ という会社からヘリコプターをチャーターし、パイロットおよび整備の計 5 名が同行者として参加した。

観測隊ヘリコプターによる野外観測は、生物圏、気水圏、地圏・測地、宙空圏グループを中心に行われた。南極大陸氷床上のS17 や、ラングホブデ、スカルブスネスなどの沿岸域を中心に、遠方では昭和基地から約 120km 離れた、しらせ氷河やインホブデといった地域でも観測が実施された。南極大陸氷床上の S17 では、無人飛行機を使った観測も実施され、無人飛行機で世界初となる高度での観測に成功している。さらに、ヘリコプターによる海氷厚観測を初めて導入し、昭和基地周辺で海氷観測を行った。

一方、「しらせ」は、帰路の観測の実施に備え、1 月 27 日に昭和基地を離れ、往路と同様に約 15 日間かけてラミングを実施し、2 月 11 日に多年氷帯を抜けた。この間に、残りの持ち帰り物資の空輸なども実施された。また、2 月 1 日には、55 次越冬隊との越冬交代式が行われた。2 月 1 日以降、55 次越冬隊員や 56 次夏隊員・同行者が順次「しらせ」に戻り、最終的に、2 月 15 日に、夏期の観測や基地作業を終え、全員無事に「しらせ」に戻った。

「しらせ」は、2 月 15 日に北上を開始し、帰路についた。観測を行いながら、2 月 17 日には氷海を抜け、18 日に昭和基地沖での観測を終了した。往復路のラミング回数の総計は、5,406 回と史上最多となった。今次隊の活動中、2 月 3 日に「しらせ」の自衛隊員 1 名が急逝されるという、不慮の不幸な出来事があり、ご遺族との早期対面等を実現するため、復路観測を変更し、予定より早期にフリマントルへ入港する事となった。これにより、55 次越冬隊員や 56 次夏隊員・同行者は、予定より約一週間早く 3 月 13 日に帰国した。なお、第 56 次隊の別働隊である海鷹丸で観測を行うチームも、南極海での観測を完了し、無事帰国した。

## 第 18 回「南極の歴史」講話会を秋田支部と共同開催

**（2015 年 4 月 18 日（土）14:00～16:30　秋田県にかほ市青少年勤労センター）**

第 18 回「南極の歴史」講話会は、2015 年 4 月 18 日（土）14 時より、秋田県にかほ市青少年勤労センターで開催された。

講話会は今まで東京でのみ行われてきたが、今回は新たな試みとして支部と協力して各地で開催し、併せて支部との協力推進を通じて南極 OB 会の活動を充実することを目的に実施した。

今回は最初の企画として、支部活動が充実し、白瀬矗のゆかりの地でもある「白瀬南極探検記念館」のある秋田県にかほ市で開催した。当日の講師は四人で、白瀬南極探検隊に関係する話題を中心にお話しいただいた。講師と講演テーマは以下の通りである。

・宇都正太郎　氏　　「開南丸の航海」
・渡辺興亜　　氏　　「杉村楚人冠」
・井上正鉄　　氏　　「白瀬矗の南極探検」
（「南極条約」原署名国日本・南極の歴史を築いた秋田縁の諸先輩）
・湯川武弘　　氏　　「白瀬中尉を偲ぶ会発足から記念館創設まで」

今号では、開催の概要について秋田支部からの報告を掲載すると共に、渡辺興亜さんからお寄せいただいた「杉村楚人冠」の講演概要を掲載します。

# 第 18 回「南極の歴史」講話会（秋田講演会）　報告

秋田支部幹事長　佐藤安弘

## １.「南極の歴史」講話会の準備

2014 年末に南極 OB 会から「南極の歴史」講話会は東京ばかりで実施してきたが、地方においても開催することが望ましいので、第 18 回は秋田県で開催できないかという提案があり、秋田支部では１月上旬に会議を開き検討した。会場については、いろいろ意見が出された。例えば、「にかほ市」では距離的に遠すぎ交通の便が悪い、今までの経験から言うと「秋田市」の開催は、かなりの聴講者が集まる、秋田市なら交通の便・ホテル・懇親会等の設定がしやすく、会場も確保しやすい、などの点から当初は秋田市での開催を希望していた。その後、白瀬南極探検隊記念館が「にかほ市」での開催を熱望しており、講話会については全面的に支援をするということで、秋田支部と白瀬記念館で何度か打ち合わせを行った。

結果的に 4 月 18 日（土）、「にかほ市青少年勤労センター」で開催することを決定し、秋田支部と白瀬記念館は開催に向けて積極的に取り組むことを確認した。

その後、3 月には白瀬記念館において南極 OB 会運営委員（神田啓史・白壁弘保・松原廣司）と白瀬記念館館長（佐藤豊弘）・秋田支部（佐藤安弘）の 5 名で詳細部分の打ち合わせを行った。開催当日の送迎については、「にかほ市」からマイクロバスを提供してもらい、一般の参加者の送迎も含めて午後 12 時 10 分に秋田駅東口から出発することとし、秋田空港からは秋田支部会員のマイカーを提供して貰い各時間帯に合わせて送迎することにした。事情があり時間帯に合わない人には「前記念館長」の北村正氏の協力を得て、送迎することにした。

## ２.「南極の歴史」講話会

白瀬記念館館長佐藤豊弘氏の総合司会のもとで進められ、冒頭に斉藤光正氏（にかほ市教育長）の歓迎の挨拶、神田啓史南極 OB 会運営委員長（南極 OB 会長代理）から講話会の趣旨についての説明があった。当日の講話会には一般を含めて 80 名ほどの参加者があった。

佐藤豊弘氏

斉藤光正氏

神田運営委員長

講話会は宇都正太郎氏「開南丸の航海」、渡辺興亜氏「杉村楚人冠」、井上正鉄氏「白瀬矗の南極探検」、湯川武弘氏 「白瀬中尉を偲ぶ会発足から記念館創設まで」の順で大変興味深い講演が続いた。（講演の詳細は別途、掲載予定）

## ３．南極 OB 会懇談会

懇談会の様子

講話会終了後、懇親会までの約１時間、別室で OB 会員の懇談会を行った。懇談会の趣旨は東北地域で支部を組織している県は秋田と宮城だけなので支部結成のための準備についての意見交換であった。青森県から出席された OB からは全く交流がなく寂しく思う、秋田支部からは在籍した OB 会員は他県に移っても組織が無く、秋田支部に籍を残したまま情報交換している、などの現状が話された。青森県から３名の OB 会員（斉藤捷一氏・佐々木利氏・鮎川恵理氏）が参加されていたので、鮎川氏に OB 会との連絡係をしていただきながら、協議・検討をしていくことになった。

**青森も一緒に活動します。**

**懇談会と並行して、白瀬矗ゆかりの「浄蓮寺」施設を参る。墓の前で佐藤忠悦氏の説明。**

**４．懇親会**

午後 6 時から懇親会が始まった。井上正鉄氏（支部長）の開会挨拶に続き、佐々木弘志氏（白瀬顕彰会々長）の歓迎挨拶と乾杯の音頭で歓談に入った。会場には地酒と南極の氷を使ったオンザロックなどが用意され喉を潤しながら楽しんだ。

その後「にかほ市温泉保養センターはまなす」に会場を移して二次会が始まった、大先輩の柴田鉄治氏の部屋を占領（全員が集合）、自己紹介等を行いながら佐々木敏美氏（海自）持参の酒と鮎川氏提供の海産物で大いに盛り上がり、久々の南極気分を味わった次第である。

初めての地方開催の「南極の歴史」講話会であったが皆さん方のご協力をいただいて成功裏に終えることが出来た。お世話になった全ての方々に深く感謝申し上げます。有難うございました。

# 極地探検に卓越した見識の杉村楚人冠

## 渡辺興亜（11w,15w,29w,35s）

白瀬矗が企画、推進した南極探検隊の実現は「英雄の時代」といわれた当時の南極探検の時代的背景を考えると高く評価されることは疑いの無いところであろう。白瀬南極探検 100 周年記念に際して南極 OB 会は白瀬隊の報告書「南極記」を通しての探検隊の再評価を試み、その成果の一つとして、白瀬隊の探検実現に対する野村直吉「開南丸」船長と当時の東京朝日新聞から幹事として探検隊事務局に参加した杉村宏太郎（楚人冠）の存在の大きさを認識したことがあげられる。

**講演する渡辺興亜氏**

今回、秋田支部の肝いりで、白瀬南極探検記念館（秋田県にかほ市）との共催で「南極の歴史講話会」を開催するに当たり、「白瀬矗」、「記念館創設」と共に「野村船長の南極航海」、「杉村楚人冠」をテーマとした理由は、今後の白瀬南極探検研究において、この二人の存在が重要なことを広く伝えたいと考えたからである。

白瀬矗は伝えられるように、明治 42 年（1909）、ペアリー（米）の北極点到達に触発されて南極探検を発起した。帝国議会に経費下付の請願をするも実現せず、「成功雑誌社」社長村上濁浪の発案で、明治 43 年 7 月 5 日に神田錦輝館で計画発表会を開催、多くの市民の関心を後押しに後援会（大隈重信会長）を発足、実現に踏み出した。そうした流れの中で朝日新聞も後援を表明、杉村宏太郎（楚人冠）は朝日側の幹事として探検隊本部に参加、学術計画の拡充に参画したようである。しかし、用船問題からのちに朝日新聞は後援から撤退した。

楚人冠はその後も新聞記者としての関心を持ち続け、白瀬探検隊出発の一週間前（11 月 22 日）から 12 回に亘って、「南極探検」を朝日新聞紙上に連載した。連載記事の内容は極地探検の当時の趨勢、南極の自然、探険船、探検技術、白瀬隊の計画など幅広

いテーマについて詳述している。連載文面から楚人冠が南極探検に関して卓越した識見をもっていたことが窺えるのである。極地探検、極地の自然に関しては彼自身が経験して得たわけではなく、探検報告その他の外国文献から新聞人としての取材能力を発揮して読み取り、知識として体系化したのであろう。二三の例を上げるならば、極地用天幕について、犬ぞりの形状について、極地の雪面の形状とその形成機構について、探検用燃料について等相当詳しく記述し、内容はかなり正確である。そうした極地に関する知識は白瀬隊にとっての貴重な情報となっていたに違いあるまい。「南極記」研究でのいくつかの疑問もこの連載記事で氷解したのである。

## 話　題　「南極賛歌」の合唱曲（池辺晋一郎作曲）が誕生した！

7次隊に報道記者として同行した私は、南極の素晴らしさに感動して、「もう一度行きたい」とずっと心に秘めてきた。そして40年後、その思いを実現させたのだ。

40年ぶりの南極は、思っていた通り素晴らしかった。とくに、米同時多発テロからアフガン戦争、イラク戦争と世界中がキナ臭くなっていたときだけに、南極の、国境もなければ軍事基地もない、平和な姿にひときわ感動したのである。

「地球の九条もしくは南極賛歌」の初披露の模様（東京新聞撮影）

そこで帰国後、「世界中を南極にしよう！」という本を書いたり、「愛国心ではなく、愛地球心で」と講演したり、南極の平和な姿を地球全体に広げたいと活動を続けていた。その講演を聴いた友人の一人が「きょうの話を詩にしてくれないか。池辺晋一郎氏に作曲をしてもらうから」と言ってきたのだ。

「それはうれしい話だ」と喜んだ私は、作詞の経験もないのに別稿のような「南極賛歌」と題する作詞を大急ぎで創って友人に送った。友人が池辺晋一郎氏に取り次いだところ、「忙しいのでいつできるか分からないが、引き受けましょう」という嬉しい返事だった。

そして待つこと7年、2014年春、「実に実に遅くなりましたが、ようやくできました」という手紙とともに、池辺氏から楽譜が届いた。混声四部合唱曲で、「日本のうたごえとして、どこでどのように歌われてもいいのです」という嬉しい言葉までついていた。

私はお礼の言葉を述べようとすぐ池辺氏を訪ねたところ、池辺氏は題名を「南極賛歌」ではなく、「ちょっと長いけど『地球の九条もしくは南極賛歌』としませんか」という提案をした。池辺氏は「音楽九条の会」の呼びかけ人であり、「世界平和アッピール7人委員会」の委員でもあるので、「地球の九条」という言葉を題名に入れたかったのだろう。

私は一瞬、「題名としては長すぎるかな」と思ったが、南極にも憲法九条にも惚れ込んでいる私としては、反対する理由はなく、すぐ「そうしましょう」と同意した。

そして2015年1月25日、調布九条の会「憲法ひろば」創立10周年記念の「池辺晋一郎さんと平和を歌おう」の催しで、調布「憲法ひろば」合唱団による混声四部合唱「地球の九条もしくは南極賛歌」が披露された。

会場で合唱曲を聴きながら、私は涙が出るほど感動した。この曲が日本中に、いや世界中に広がり、「世界中を南極にしよう！」

という私の夢が一歩でも前進すれば、これほど嬉しいことはない。そんな思いを胸に、合唱曲に耳を澄ませた。

【別稿】 地球の九条もしくは南極賛歌

1 南極は 地球の九条だ
国境もない 軍事基地もない
人類の理想を実現 平和の地

2 南極は 素敵な自然の楽園だ
ペンギンがいる アザラシがいる
生き物が 共存 共栄 豊かな地

3 南極は 宇宙に開く地球の窓だ
オーロラがある 隕石がある
なぞを解き 未来をさぐる 科学の地

4 南極は 地球環境のモニターだ
氷を掘る オゾンを測る
力を合わせ 環境守る モデルの地

5 南極は 地球の憲法九条だ
戦争なくし 人類仲良く
世界中を 平和に変える 魔法の地

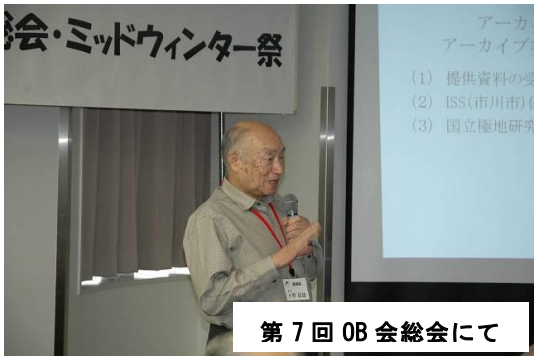
柴田鉄治（7 次隊夏、47 次隊夏）

# 追悼 小 野 延 雄 先生

小野延雄先生は昭和 8 年東京市に生まれ、東北大学理学部地球物理学科を経て、北海道大学低温科学研究所助手、57 年 4 月教授。その後、平成 2 年 6 月に国立極地研究所北極圏環境研究センターに転任、センター長、資料主幹、研究主幹、企画調整官を歴任し、平成 9 年 3 月に定年により退職された。

永年にわたって、海洋学の研究に努め、特に極域海洋の海氷の物理的性質、その成長過程の研究では大きな成果をあげ、船体着氷に関する研究の成果は実用面でも活用され国際的に高い評価を得ている。また、オホーツク海沿岸に設置された流氷観測レーダーの映像の解釈を航空写真との対比から明かにし、流氷の運動予測の基礎を確立した。これらの業績に対して、昭和 59 年日本雪氷学会学術賞が授与され、また日本雪氷学会会長として雪氷学全般の発展にも寄与されている。

第 3 次南極地域観測隊に海洋観測担当隊員として参加し、極域海洋学の発展に貢献



第 7 回 OB 会総会にて

するとともに、北極域ではアラスカ、カナダ北極海、ボスニア湾における海氷観測に参加された。ノルウエー極地研究所の協力のもとに、スバールバル諸島ニーオルスンに日本の観測基地を設け、北極域における日本の最初の恒常的観測活動の礎を築かれた。

南極 OB 会設立に尽力され、OB 会副会長として OB 会活動にも多大の貢献をされている。

（渡辺興亜）

# 南極関連情報

**第 55 次越冬隊および第 56 次夏隊の帰国**

平成 25 年 11 月 22 日に日本を出発した第 55 次越冬隊牛尾収輝隊長以下 24 名および平成 26 年 11 月 25 日に日本を出発した第 56 次野木義史観測隊長兼夏隊長以下 38 名（同行者含む）が、平成 27 年 3 月 13 日（金曜日）に帰国した。

**第 55 次越冬隊および第 56 次夏隊の帰国報告会および懇談会**

帰国した第 55 次越冬隊および第 56 次夏隊の帰国報告会と懇談会が、平成 27（2015）年 4 月 13 日（月）明治記念館で、国立極地研究所主催で開催された。

56 次隊は、夏隊 34 名、越冬隊 26 名の合計 60 名で編成された。このうち、「海鷹丸」

に夏隊員 7 名が派遣され、これまで最多の 8 名の女性隊員（越冬隊 1 名、夏隊 5 名、海鷹丸 2 名）が参加した。また、27 名の同行者が夏隊に参加した。55 次隊に引き続き 2 年続けて「しらせ」が接岸でき、昭和基地へ 1,037 トンを輸送することができ、持ち帰り物資は、氷上輸送、空輸併せて約 410 トン持ち帰ることができた。氷状は依然厳しく、往路のラミング回数は過去最多の 3,187 回で、総計でも 5,406 回と過去最高となった。

帰国報告会で牛尾収輝 55 次越冬隊長は、例年より少ない越冬隊員での基地運営の状況や調査活動の状況を説明した。そうした厳しい状況下で、52 次から始まった大型大気レーダー（PANSY）による 1/4 システムでの対流圏・成層圏・中間圏の通年観測、4/5 システムでの試験観測などを継続し、新開発した $CO_2$ ゾンデで南極初の観測を実施した。また内陸調査旅行では新規導入した雪上車の走行試験などを着実に実施し、毎月定例で遠隔医療相談、南極教室（14 回）、昭和基地 NOW（52 回）など昭和基地からの情報発信に努めた。第 47 回衆議院選挙では公職選挙法で定められた不在者投票を行った。

昭和基地は、近年の多雪傾向が継続しているが、除雪作業は前日夕方と当日の朝のミーティングで、人員・内容を調整、確認して実施したとのことであった。

功労者表彰を受けた皆さんと白石所長

56 次隊の野木義史隊長は、中型ヘリ 1 機と小型ヘリ 1 機を持込み、沿岸や内陸観測に活用し、海氷厚観測にヘリコプターを初めて導入したこと、PANSY は、全ての整備が完了したこと、大陸氷床上の S17 で、気球分離型 UAV 観測を活用し、観測高度の世界記録を更新、アウトリーチ活動として「教員派遣プログラム」で同行した小学校および中学校の教員 2 名が TV 会議システムを使用し、「南極授業」を実施した。

東京海洋大学・海鷹丸は、オーストラリアのフリマントルから東経 110 度線を南下、海洋物理・化学の定常観測をはじめ研究観測、モニタリング観測などを行った。

懇談会で挨拶をする赤池文部科学大臣政務官

この帰国報告会の後、会場を移し、懇談会を開催し、55 次、56 次、海鷹丸関係者、帰国した「しらせ」の関係者など多数が参加した。白石所長開会の挨拶に続き赤池文部科学大臣政務官や国会議員らの来賓の祝辞があり、三浦英樹 56 次越冬隊長が昭和基地から発信した祝辞などが披露された後、この後懇談に入り、功労者表彰など帰国した隊員たちの労をねぎらい、最近の南極事情などに話題が広がった。

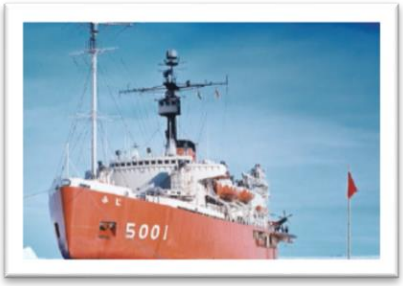
（松原廣司）

# 連載　支部便り㉔　（東海支部）

東海支部の長田和雄さん（27w、45w）から、以下の情報がありました。

**南極観測船ふじ 30 周年記念特別展**
**「南極とふじが果たした役割（仮）」**
**平成 27 年 7 月 18 日（土）～9 月 27 日（日）**

南極観測船ふじは、昭和 40 年から昭和 58 年までの 18 年間、我が国の南極観測事業を支援する船として活躍し、引退してから現在に至るまで名古屋港で実物の船を紹介する博物館として係留され、2015 年で開



館してから 30 年、建造から 50 年という節目を迎えます。本特別展では、南極観測船としての特殊な船の構造や、南極観測で果たした役割を中心に「ふじ」を紹介し、海や南極の自然、地球環境問題を学んでいただくものです。

**以下は東海支部の企画です。**

ふじ 30 周年記念事業実行委員会では、（公財）名古屋みなと振興財団、南極 OB 会・東海支部と協力し、下記の記念イベントを行います。お誘い合わせの上、ぜひ参加ください。

１）「南極観測隊員・ふじ乗組員のお宝展示会」
開催場所：
名古屋港ポートビル 2 階・B 会議室
開催期間：7 月 25 日～10 月 25 日
開催時刻：
期間中の 9：30～17：00（月曜休館）
内容：当時の写真や思い出の逸話を書いたパネルの展示、南極観測に関するお宝の展示。

２）「私の《お宝》を語る」
開催場所：
名古屋港ポートビル 2 階・B 会議室
開催日:①8 月 16 日（日）、②9 月 26 日（日）、③10 月 11 日（日）
開催時刻：
午後 1 時 30 分から 15 時 30 分（予定）
内容：
当時の写真やお宝を前に、思い出や逸話を紹介。南極ミニ講演会と南極手品教室も！

３）アマチュア無線局の開局
開催場所：
名古屋港ポートビル 2 階・B 会議室（イベント時にはふじ船内でも）
開催日：
「お宝展示会」期間の土日祝日（予定）
開催時刻：未定
内容：日本アマチュア無線連盟愛知県支部と協力し、「ふじ」にちなんだ無線局を開局。アマチュア無線を通じて国内外に情報発信をおこなう。

# 連載「帰国後の各隊の動き」（隊次順に掲載）

## 29 次昭和越冬有志（在九州）の集い

バレンタインデーを前にした 2015 年 2 月 13 日、坂（宙空）の呼びかけで、市川（地球物理）、井上（医療）と横野（通信）が湯布院の湯平温泉で集まった。渡辺隊長も遠路駆けつけていただき、洞窟温泉・旅館「志美津」の地鶏、やまめなど地元の食材を使った豪華な食事に舌鼓をうちながら、それぞれの近況、南極 OB 会のことなど、話の花が咲きました。

宿泊室にはコタツ、井上さん提供の九州銘酒もあり、深夜を過ぎても議論は尽きませんでした。

翌朝は井上さんの今やお宝とも言える年代ものの「ランクル」で長者原、大吊り橋まで足をのばし、再会を誓いながら湯布院駅で解散となりました。

**洞窟温泉・旅館志美津の前で**

※（　）カッコ内は越冬当時の担当

（横野孝司）

## 【43 次帰国 12 周年記念　夏期オペレーション】

左 53 度、右 41 度ー。初代「しらせ」（現 SHIRASE）に刻まれた最大動揺だ。43 隊（2001 年 11 月～03 年 4 月）の往路で記録した。

その「しらせ」艦内で、帰国 12 周年を記念した「夏期オペレーション」が 2 月 7、8

両日あった。船に集い、宿泊もする夢のようなイベントで、隊員や家族 41 人が旧交を温めた。

夏期オペではまず、昨年死去した窪田公二隊員の冥福を祈り黙とう。続いて 22 年間極地研究所に奉職し、昨年 6 月退職した神山孝吉越冬隊長の記念講義があり、南極観測とかかわるようになったエピソードを披露した。

3 隊員の近況報告もあり、氏家宏之隊員が東北地方で遭遇した東日本大震災のすさまじい揺れや、停電や断水で不便を強いられた被災地の暮らしを報告。小原徳昭隊員は、自身も開発や観測に関与する無人飛行機による地磁気やエアロゾルの研究など、進化を続ける観測の今を紹介した。高橋弘樹隊員は、越冬中の観測結果と、帰国後の風洞実験、流体解析を併せて導いた昭和基地周辺の吹きだまり形成のメカニズムを解説。この研究は、廃棄物処理棟移設の参考となったという。

神山孝吉越冬隊長

宴会は新習志野駅近くの居酒屋で行われた。「しらせ」に戻り、44 次隊から 6 年ぶりに再開されたドームふじ基地での越冬に向け、基地整備のための内陸旅行の奮闘をまとめた動画を上映、夜通しグラスを傾けた。

翌日は艦内を清掃後、船をバックに記念写真を撮影。シンボルカラーのアラートオレンジは色あせ、船体には錆も目についた。だがそれは「劣化」ではなく、氷に閉ざされた南極での観測を支えた「功績」の証しだと感じた。

船をバックに記念撮影

「SHIRASE」は 1983 年から 25 回に及ぶ南極航海で役目を終え、スクラップ処分が決まっていた。だが各方面からの惜しむ声に押されて文部科学省は再入札を行い、気象情報提供会社のウェザーニューズが購入した。現在は財団法人「WNI 気象文化創造センター」が管理し、年 5 回の体験型イベントを開く。夏期オペでの使用は、西尾文彦観測隊隊長が財団評議員を務める縁で実現。今後も、観測隊や自衛隊員たちの交流の場、また、南極観測の情報発信の場として、活躍が期待されている。

（43 次夏隊同行　重川英介（西日本新聞））

## 会員の広場

### おめでとうございます：叙勲、受賞

| | | |
|---|---|---|
| 前　晋爾　氏（20、24 次冬、23 次夏） | 平成 26 年春 | 瑞宝中綬章 |
| 中条 賢治 氏（16 次冬） | 平成 27 年春 | 瑞宝双光章 |
| 手塚 正一 氏（22、27 次冬） | 平成 27 年春 | 瑞宝双光章 |

訃報　ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

| お名前 | 隊次 | 部門 | 逝去月 | 享年 | お名前 | 隊次 | 部門 | 逝去月 | 享年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 岡本裕充 | 1s,2s | 電波研 | H27.1 | 86 | 小野延雄 | 3s | 海洋 | H27.4 | 81 |
| 荒金兼三 | 1s,3w,5w,7w | 機械 | H27.3 | 93 | | | | | |

## 2015 年度南極ＯＢ会総会･ミッドウィンター祭の開催について

日 時：2015 年 6 月 20 日（土）受付 14:00 より
場 所：日本大学理工学部 1 号館 2 階 121 会議室
プログラム：（1）　第 19 回「南極の歴史」講話会　：　14：30～15：50
南極観測再開 50 周年　ふじの時代　：講師　國分 征
しらせの時代　：講師　神田啓史
（2）　南極ＯＢ会総会　：　16：00～17：00
（3）　ミッドウィンター祭（南極倶楽部同時開催）：　17：00～19：00
会員の皆さまの沢山の参加をお待ちしています。詳細は、同封リーフレットを確認ください。

## 南極 OB 会アーカイブ事業報告

南極 OB 会は元観測隊員等が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。資料の受け入れについては南極 OB 会事務局にお気軽にご相談ください。

## ＊＊＊　広報委員会からのお知らせ　＊＊＊

**○通信費納入のお願い**

年度初めに当たり通信会費の納入のお願いと振込用紙を同封しました。また、会員の皆さんから通信費納入状況についての問い合わせが多いため、過去（5 年間）と今年度の通信費納入状況を封筒の宛名ラベルに記入しています。確認の上、通信費の納入をお願いします。

【編集の終りに】

**➢日本極地研究振興会からのお知らせ**

南極と北極の話題が詰まったメールマガジン（無料）が（公財）日本極地研究振興会から４月１日に発行されました。振興会ホームページ（http://kyokuchi.or.jp/）を参照ください。

**➢初代しらせの中での南極ＯＢ会の活動の様子**

右図は、イラストレーターでグラフィックデザイナーの藤井美智子さんに描いていただいた初代しらせ（現在、船橋港に係留　）の中での南極グッズ販売の模様です。この部屋の隣では、極地研から提供いただいた写真パネルやＯＢが持ち寄った資料を元に南極観測について解説しています。

**********

南極ＯＢ会事務局　〒101-0065　東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301
電話　：03-5210-2252　　FAX　：03-5275-1635
メール　：nankyoku-ob@mbp.nifty.com
郵便振込：加入者名　南極ＯＢ会　00110-1-428672
南極ＯＢ会ホームページ　：http://www.jare.org /

**********